
兄の話

なみあと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄の話

【Nコード】

N6199W

【作者名】

なみあと

【あらすじ】

兄は美形で長身で、モデルのようにスタイルが良くて性格が悪い。
そんな彼はひとつ、奇妙な特技を持っていた――。

私の兄と、彼を兄と呼ぶ私の話。

※ジャンルは「オカルト」と「推理」を足して2で割った感じ
思ってください。

※1週間に1度くらいのペースで更新する予定です。

※twitterでも更新報告を行っております。よろしければ
ご利用ください。(ID:nar|nar|nar)

※他サイトとの重複投稿を行っております。ご了承ください。

起

「そういえば、お兄さん」

と私が呟いたのは、ガードレールに括られたペットボトルを見たからだった。

＊

「ん？」

私の呟きを聞きとめて、前を歩く兄が肩越しに振り返った。

今は夕方、夜七時に少し足りない。とはいえ夏のさなかであるから、まだ辺りはそこそこ明るいままだ。

兄からメールが来たのは本日、ちょうど四限の講義が終わったときだった。さて帰ろうかと荷物をまとめていたところへ「仕事終わりに時間があるので、一緒に夕飯でもどうか」と誘いを貰い、私はこうして新宿まで出てきたのである。

駅前で待ち合わせをして兄と合流し、さて何を食べようかとあてもなく歩いていたところに、私はそれを見つけた。

目の前の信号はちょうど赤になったところで、立ち止まった兄と肩を並べる。

「なんだ」

「いえ、たいしたことじゃないんですけど」

こちらを見下ろす兄に、断るようにそう言うと、兄はフンと鼻を鳴らして「下んねエ話なら聞かん」と愛想なく答えた。

仕事で何かあったのかは知らないが、どうやらあまり機嫌がいい

わけではないらしい。そういうときにわざわざ呼び出さないで欲しいと思うわけだが——なんにせよ。こういうときの兄に、本当に『たいしたことのない』話をする、怒りの矛先が私に向くことを経験上知っていた。だから、

「いや、やっぱなんでもないです」

「言いかけてやめんな」

しかし辞退もまた、兄の怒りに触れてしまうようだった。

——『天上天下唯我独尊』。

そんな言葉が似合うこの人のことを、私は「兄」と呼んでいる。とはいっても血縁上、戸籍上私と関係があるわけではない。知り合いの男の人、という意味でなんとなく呼んでいたのが定着してしまっただけだ。

兄というひと。この人の容姿は、そこらの有象無象よりははるかに優れている。ストレートの黒髪と切れ長の焦げ茶の瞳、すらりとした高い背丈と、非常にバランスの整った風貌をしている。人ごみを歩けば声をかけられ、駅前で芸能スカウトやファッション雑誌の取材の依頼を受けたこともあるとかないとか。整形でもしているのかと疑いたくなるような完璧な顔立ちだが、どうやら完全な自前らしい。外見だけなら、この人に勝てる者はなかなかいないだろう。

……だというのに。

この兄、非常に、性格が悪い。

自分の気に食わなければ容赦なく殴るし、文句があれば思ったことを歯にももの着せずそのまま言う。この外見に惹かれて近づいて、その毒に泣きを見た女性は決して少なくないらしい。はじめてその逸話を聞いたとき、まるでイソギンチャクかチョウチンアンコウのような人だなあ、と思ったことを覚えている。

そしてこの人、容貌のほかに、群を抜いて優れている点がもうひとつあるのだが——それはさておき。

「それ見て思い出したんですけどね」

話さなければ兄は百パーセントの確率で怒るのだ。だったら少し

でも救済の可能性のあるほうを選ぼうと、私は白いガードレールを右手で指した。

兄の視線がそれを追う。そこは、交差点の四つ角のひとつ。ガードレールの足の一本には、ペットボトルが一本、細い針金でぐるぐる巻きにされていた。ペットボトルには水が満たされ、まだ真新しい切花が挿さっている。そしてその真下には、缶ジュース一本と数本の線香が置かれていて……それらが示すものは、つまり。

けれど私が話したいのは、ここで死んだどこかの誰かのことはなかった。

「この間、大学の近くの交差点で幽霊が出る、って話を聞いたんです」

「幽霊？」

少しずつ信号待ちの人が増えてきて、やがてペットボトルは人の足に遮られ見えなくなった。私は小さく首を縦に振る。

「そうです。……聞きます？」

「いいからさっさと答え」

上目遣いで探るように尋ねると、兄はあごをしゃくって先を促した。

先ほどと口調はそう変わらないが、それでも怒ってはいないようだ。そして続けろと指示するあたり、その話に興味を持ったのだろう。私はハイ、と返事して、その噂について話しはじめる。

「大学の友達から聞いた話なんですけど、二ヶ月前あたりから、学校の近くの交差点で男の子の幽霊が出る、っていう噂があるらしいんです。

で、その学校近くの交差点にあるガードレールの脚のうち一本に、さっきのペットボトルと同じような感じで、花瓶が結び付けられているらしいんですが、夜、何も活けられてないそれをじいっと見ている男の子がいるそうです。

通りかかった人たちが、いったい何をしているのかと不思議に思っ
て、男の子に、どうしたのって尋ねるとですね——その真っ赤

な目と耳まで裂けた口をぐるりと向けて『僕の為に花を活けておくれよおおおおおおおおお痛ァ!』

「話盛んな」

容赦なく脳天に拳固を落とされて思わず頭を抱えるが、しかし兄は心配などするわけがない。悲鳴を上げる私に冷ややかな視線を向け、

「で」

「……時間も時間だし、子供が一人にいるなんておかしいでしょう。だから、どうしたのって声をかけると、こちらも見ることもなく、ただすうっと消えていくらしいです」

痛いのは痛い、誇張したのは事実なので文句も言えない。第一、文句を言ったところでもう一発食らうだけだろう。だから今度は素直にそう締めくくると、兄はふうん、と鼻を鳴らした。

「『らしい』が多いな」

腕組みをし、ぼそりと言う。

と同時に、信号が青に変わった。人の波が一斉に動きはじめて、私たちもそれと一緒に歩き出す。

文句をつけられたように感じて、私は思わず唇を尖らせた。

「だって私が実際に見たわけじゃないですもん。全部友達情報です。そもそもその交差点自体、私は通学路じゃないんでそう行かないです。花瓶があることだって、その話聞いて始めて知りましたよ」

「その交差点、具体的な場所わかるか」

しかし兄は私の言い訳など聞きもしない。聞くわけがない。いつの間にやら取り出していた携帯電話の画面を眺めながら、そんなことを問うてきた。そして文句を言ったところで、拳が落ちてくるくらいに役にしか立たない。

だから私はおとなしく、その質問に答える。

「どこ……ええと、なんだっけかな、番地はわからないけど、公園の近くです。カリガネ公園って言ったかなあ、でっかいパンダの滑り台がある公園ですけど、知らないですよ」

「ああ、あそこか」

御苑や恩賜公園のような大きな施設ならまだしも、カリガネ公園は子供が遊ぶような小さなそれだ、兄が知るわけはないだろうと思いつながら駄目もとで言ってみると、意外にも兄は、合点がいったかのように頷いた。

横断歩道を渡り終えると、兄の足が左折を選んだ。それが意識的にかそれとも無意識にかはわからないが、自然と私もそれを追って左に進むことになる。

「知ってるんですか」

「世田谷のあそこだろ。二年くらい前までその近くに住んだ。：けど、花瓶なあ」

眉根を寄せ呟いて、思い出すように虚空を見上げる。

そして顎に手を添え、変だな、と首を傾げた。

「ありゃあ俺が住んでた頃からあったぞ」

「えっ」

予期せぬ言葉に、私は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「本当ですか」思わず尋ねると兄は「嘘吐いてどうするよ」呆れたように答える。

「確か俺が引越すより一年くらい前だったから、今からだいたい三年前か。交通事故で、女性が一人亡くなったな。そのときに遺族が弔いのために設置したんだったような気がするが……」

最後まで聞かずとも、言いたいことはわかった。

「じゃあそれは、男の子のために置かれてる花瓶じゃない、ってことですか」

「少なくともガキの幽霊が眺めるにはおかしいってエのは確かだな。もし俺の記憶違いでそのとき死んだのがガキだったとしても、三年も経った今になって化けて出るのはおかしい」

「そうですよね……」

と、私が同意したそのとき。

話し始めてから少しずつ遅くなっていた兄の歩みが、遂に止まっ

た。

「あ」

そしてこのときになってようやく、私は気づいたのである。

——まずい。

これは、非常にまずい状態だ。

恐る恐る兄を見やれば、顎に手を当て俯いて、見方によってはどことなく物憂げな様子。外見『だけなら』誰しも認める兄のその格好は非常に絵になっていたが——残念ながら兄の内面も知る私には、それは見惚れるどころか嫌な予感の種にしかない。

どうやら私の話は、兄の『好奇心』に触れてしまったらしい。

話題の矛先を変えようと、私は慌てて早口でまくし立てる。

「そんな感じで私の学校のちよつと不思議な噂話でした！ さあてお兄さんそんなことより何食べましようか、このまま行くと新宿高島屋ですけど上階のレストラン街がいいですかねっ私的には十三階にある欧風料理のお店がお勧めなんですよこの間学校の友達とランチに行ったんですけどお兄さん知ってますかあのお店結構いいお肉とかお野菜とか使ってるんですけどデイナーもそれほど高くなくってェ——」

「行くぞ」

しかしすべては遅かった。

私の努力は意味をなさず、兄はそもそも私の話など聞かずに回れ右をする。ポケットから携帯電話を取り出して何やら操作をしながら、ずかずかと大股で、来た道を引き返し始めた。

「お、お兄さんっ」

こうなってしまったら、私にできる抵抗はない。慌てて兄の背中を追った。体格上兄より歩幅の狭い私は、半ば駆け足で後を着いていくことになる。

せっかく渡りきった信号が点滅する中、私たちは急いで横断歩道を戻っていく。

……どこに「行く」のかなど、聞かなくてもわかりきったことだ

った。そして、この人の下した決定にどんな文句を言ったところで無駄だということもまたよくわかっていて、だから私は、別のことを兄に尋ねた。

「ちよっとお兄さん、夕飯はっ？」

「ンなもん後だ、後」

それもまた、聞かなくてもわかっていたことではあったが。

時計は今、ようやく七時を回ったところ。

【「兄の話・承」に続く】

承（1）

電車に揺られて十分ほどで、例の事故現場の、最寄り駅に到着。

日は沈んでも、まだ早い時間だからか駅前に人足が途絶えることはない。そしてさすが関東平野の夏の夜、湿度は高くて温度も下がる気配を見せない。暑いよう、と文句を言ったら「俺も暑い」と睨まれたので、それ以降気候に関してものを言うのはやめた。

裏路地に入ると、人の量は圧倒的に減る。店は格段に少なくなり、立ち並ぶのは民家ばかり。辺りの家々から団欒の声が漏れ聞こえる中、公園に向かって歩いていく。

そのとき、兄の携帯電話が鳴った。どうやらメール着信らしい。

「やっぱりな」

「どうしました？」

携帯電話を操作し、何やら納得したように頷く兄に尋ねると、彼は「言ったとおりだろ」と携帯電話をこちらに向けた。スマートフォンの大きな画面には、細かい文字が映し出されている――新聞記事？

私は記事の中で、一回り大きな文字で書かれたそれを読んだ。

「『死亡ひき逃げ事件で市職員逮捕』……？」

■死亡ひき逃げ事件で市職員逮捕

警視庁世田谷警察署は十八日、埼玉県何某市職員、何某容疑者を自動車運転過失致死と道交法違反（ひき逃げ、酒気帯び運転）の疑いで逮捕した。逮捕容疑は同日午後六時ごろ、世田谷区何某の市道交差点で乗用車を運転し、歩道を歩いていた同市の主婦芹見沢赤音

さん（二九）と男児（二）に追突、そのまま逃げたとしている。芹見沢さんは頭を強く打つなどして、まもなく死亡、男児は腕や足に軽傷を負った。

同署によると、何某容疑者の呼気からはアルコールが検出された。「酒を飲んでおり、よく覚えていない。何かにぶつかったような気はするが、定かではない」と供述しているという。

文章としては長くなく、どうやら記事自体がそれほど大きく取り上げられていなかったようだった。地方面の端に、ささやかに載ったようなそれ。

「知り合いに頼んで記事探してもらった。日付は三年前の七月十八日だな。やっぱり死んだのは女だ。女の、大人」

「はあ。……でもいちおう子供も轢かれてますよ」

「その当時の怪我が原因で死んだってか？ 三年前の軽傷が原因で、二ヶ月前に？」

まあ完璧に有り得ない話じゃないけどな、と肩をすくめた。しかし、腕に軽傷ということは、つまりは擦り傷とかその程度で、それが原因で死に至ったという可能性は低いだろう。

いつも兄がするように顎に手を当て唸ってみるが、答えは出ない。若干の空腹も相まって、思考がまとまらない。考えているうちに兄は、腕が疲れたのか、かざした携帯電話をポケットに仕舞ってしまった。

そうこうしているうちに私たちは、例の交差点に到着した。

「そこがカリガネ公園だから、その花瓶は……ええっと」

友人から聞いた位置情報を、私は一生懸命思い出そうとする。

信号のない、見晴らしのいい道路。事故が起こりやすいとも考えられないその通りだが、それが記事の通り飲酒運転だったのなら、地形は事故の抑止力には繋がらないだろう。起こったとしても、無理はない。

見回して探していると、迷わず兄が、私たちから対角線上の角にあるガードレールを指さした。

「あのガードレールの左から二本目の足だ」

左から二本目の足。目を凝らして見やれば、確かに何かあるように見える。暗さも相まってよく見えない。横断歩道を渡って、そちらに行ってみると、確かに青磁色の細身の花瓶が縛られていた。一本の花も活けられておらず、中には雨水が溜まっている。人が弔いに訪れることはもう久しくないようだ。

しかし。ここに住んでいたのはもう数年前になるというのに、まだ花瓶の位置を覚えていたというのか。「記憶力いいですね」と遅れてやってきた兄を振り返るが、しかし兄は「いや」小さく頭を振った。その花瓶のほうから視線をそらさない。

「覚えてたわけじゃない。」

お前が聞いたとおり、確かにそこに『いる』からな」

「ああ……」

そういうことか。

兄の言葉に合点がいつて、頷いた。なんとなく呆れの感情に似たものを感じてしまったのは、それが示すところを私が知っていたからに他ならない。

「男のガキだ。歳は五、六歳程度、身長はざっと百センチ、比較的細身。短い黒髪。服装は緑と青のチェックのシャツに、ジーンズ、上着はなし、靴なし、白の靴下……」

——兄が人より優れている点は、容貌のほかにもうひとつある。

それは『靈感』である。

兄は俗に言う『見える人』だ。幽霊を目で直に見ることができる。……兄の力がどの程度のものなのかは私にはわからないが、少なくともそこにいる霊が、五、六歳程度の男の子であるとはつきり言い切れ、また、その服装まで細かく見られるだけの力であるのは確かだ。

美形なのに、靈感持ちでオカルトマニア。なんとも不思議な取り

合わせだと思ってしまうのは私の浅学のせいかな、それとも通常の反応かはわからないが。

何にせよ、兄は不思議な力を持っていた。

兄はその鳶色の目で、私にはわからない世界を見る。

「おい、ガキ」誰もいないように見えるそこに向けて、声を発す。そしてその空間をしばらくじいっと見ていたが、やがてあきれたように右手を振った。

「こいつ、俺のこともわからないな。他人に興味がないらしい」

「どうしてですか？」

「俺が知るか」

それはそうだ。

「しかし本当にガキがいるな。それも、女じゃなくて。……どういうことだろう」

それから兄は顎に右手を当て、少しばかり俯いた。思考に耽るときによくやる姿勢だ。こうなったときに話しかけると、たいていの場合は怒られるか文句を言われるか、殴られるか、選択肢としてはそのくらいだ。いずれにせよ、ろくなことにはならない。

話相手を失って、私は手持ち無沙汰になる。

だから私も口を閉じて、少し考えてみることにした。

交差点と、花瓶。男の子と、女性。交通事故。二ヶ月前、三年前……知っていることを、ひとつずつ反芻してみて。

「……そうだ」

私は顔を上げた。

私が少々考えをめぐらせたところで、そう簡単に答えは出る問題ではないことはわかっている。しかしそれでも、私はひとつの可能性を思いついた。それは、蓋然性の高低はともかく、可能性としてあり得ることではある。

だとすれば、確認してみる価値はあるだろう。

兄はまだ熟考しているので、私は兄のそばを離れ、勝手に調べてみることにする。

腕時計を見ると、七時二十分を指していた。辺りには、仕事帰りらしい人々がぼつぽつと歩いている。ふわっと味噌汁の美味しそうな香りが漂ってきて、空腹を思い出した。早く夕食にありつきたいと願うが、そんなことは思ったところで仕方ない。

かぶりを振って煩惱を打ち消した後、ぐるりと周囲を見回した。さて、尋ねるに適当な人は――いた。

恰幅のいい女性が、チワワを散歩させているのを見つけた。散歩の途中ということはきっと地元民だろう、あの人ならこのあたりのことを知っていそうだ。そう考えた私はなるべく裏のない、友好的な笑顔を作って、女性に駆け寄り声をかける。

「すみませェん」

私に気づいたその女性は、有り難くも無視はしないでくれた。足を止めて私を見返す。

「何でしょう？」

怪訝と不審の混じった目と、声。特筆すべき点のないただの学生に見えるが、それが自分にいったい何の用か――私へのそんな感情が、ありありと見て取れる。

しかし私はそれに気づかないふりをする。私はただの、特筆すべきところのない、そこらによくいるありふれた大学生の一ですよと、そんな笑顔を崩さないようにして、こう尋ねた。

「ちょっと聞きたいんですけど、このあたり、交通事故ってよく起きたりするんですか？」

――私が思いついたのは、まったく関係のない少年が二ヶ月前にここで事故か何かで亡くなり、花瓶とは一切関係なく、ただぼうつとそこに立っているだけであるという可能性だ。確率的な話はどうあれ、有り得ないことではないはずだった。

だからこの近隣に住んでいると思われる人間に確認をしてみよう
と思って、声をかけたのだが。

「は？」

見ず知らずの私からの突然の質問に、その女性は怪訝そうな色
深くした。しかし、そういった反応を返されるかもしれないという
予測はしていたし、そしてそうされたときの言い訳くらいは私だっ
て用意している。

私は、「ええと、実は」少し口ごもった——ような演技をした—
—後、

「私、今度、兄家族と一緒にこのあたりに引っ越してくることにな
ったんですが、近いうちに私の甥が産まれることになっていて……」
私がちらりと兄の方に目配せをすると、それを追って女性の視線
もまた兄を向いた。勝手に子持ちにして申し訳ない、と心の中で謝
罪する。聞かれたらまた殴られているところだろうが、向こうは思
考中のようだし、兄のもとからここまで距離もあるので問題ない
だろう。

私は女性に視線を戻して、

「……だから、事故が多いと怖くなって思っ。ほら、あそこに花
瓶置いてあるじゃないですか。あれって、そのう……言いにくいん
ですけど、そういうものでしょう？」

苦笑いを作りながら、尋ねる。

「ああ、なるほど」

私の説明に、女性はようやく納得したようで、表情を緩めた。

そして、私の質問に対して答えを返す。

「あの花瓶が置かれたのは、もう結構前のことですよ。昔ここで、
ひき逃げ事件があつて——」

【「兄の話・承（2）」に続く】

承(2)

話を終え、戻ると早速睨まれた。

「誰が子持ちだコラ」

どうやら聞こえていたらしい。なんという地獄耳。

だが幸運にも、拳を落とされることはなかった。私の思いついた案がいい線を行っていたと思ったか、それとも思考することに忙しくてそれどころではなかったか。

念を押すように、兄は言った。

「別人死亡説はなしか」

「ええ、まあ」

チワワの女性が言うことには、数年前の女性のひき逃げ以降、この交差点で特筆すべき交通事故は起こっていないとのことだった。私自身も、蓋然性はそれほど高くないような気がしていたが。この見晴らしのいい交差点では、事故などそう起こりようはないだろう。だからその説が否定されたところで、特に落ち込んだりはしなかった。ひとつの可能性が淘汰できたのは良いことだ。

兄は目の前——おそらくはそこにいる男の子——を、もう一度見た。

ううん、と唸る。

「……しかし、なんだ。こいつ、何か違うな」

「そりゃあ幽霊ですから。普通の人とは違うでしょうよ」

何を当然のことを、と私は言う。しかしそんな疑問を抱くほど、兄は幼子と接す機会があるのだろうか。

だが兄は、それに否定をした。

「そうじゃねエよ馬鹿。何か……なんだ。なんつうか」

と、いまいちまとまらない言葉。齒にも着せぬどころか全力で研いだ鉋でも仕込んでいるような兄にしては、珍しいことである。

何が不思議なのだろう。確かに女性のための花瓶を少年が見ている謎はまだ解けていないけれど。

「それにこの、赤黒くて丸い……」
丸い？」

——私が首を傾げていると、
「ん？」

兄が突然、顔を上げた。

「なんですか？」

「いや、今こいつが何か言った。……どちらが、しあ？ 何？ 聞こえねェんだよ馬鹿ぼそぼそ言うなもっかいはっきり言えっつんだよコラ」

「お、お兄さんお兄さん、子供いじめちゃ駄目ですよ兄さん」

今、自分には幽霊が見えなくてよかった、と心から思った。もし見えていたとしたら、おそらく今の兄は、いたいけな子供を恫喝するやくざにしか見えなかったろう。

兄は腰を折り顔を寄せて、しばし静止する。そこにいるものがわからない私は、黙って兄が何か言うのを待った。

結局その子はその言葉を、もう一度言ったのか言わないのか、それは私にはわからない。けれどどちらにせよ兄は、

「……フン」

背筋を戻し息を吐くと、その空間をつまらなさそうに見下ろした。何があったか知らないが、どうやらそこにいる『それ』に対する興味は薄れたらしい。

次いで私を見た。

「ひとつ調べたいことがある。図書館に行くぞ」

「あ、はい。……わかりました」

もう夕飯は半ば諦めている。同意の言葉はするりと出てきた。

「御友人に頼むんじゃ、駄目なんですか？ あの新聞送ってもらった」

「さっきの記事添付して送ってきたメールに、これから用事あるっ

て書いてあったからもう無理だろう。

ここから一番近い図書館どこだったかな、地図、地図……」

携帯電話をまた取り出して、今度は図書館の位置を調べ始める。その携帯電話が以前会ったときに持っていたものと違っていることに今更気づいて、私は言った。

「そういえばお兄さん、携帯変えたんですね。スマホですか」

「携帯売り場の同期が機種変しなかったって煩くてな」

画面を操作しながら、こちらを見ずに答えた。

兄は都内で、某有名家電量販店の店員をしている。本性を隠しているのかそれとも押し殺しているのか、意外にも店員としての姿は本当に店員らしく――裏ではどうか知らないが――客の前ではきちんと言業スマイルを浮かべて品物を売っているのだから意外である。お客様は神様、ということなのだろうか。

仕事の話題が出たのでふと思って、世間話程度に尋ねてみる。

「お仕事の調子はいかがですか？」

しかし。

「あゝ？」

聞き返す声に、濁点がついた。眉間にひどい皺が寄り、口角が一気に下がる。途端に鋭くなった視線が、携帯電話から私に移動。私は、ヒッ、と短く悲鳴を上げ、まるで蛇に睨まれた蛙のような気分になる。

だが直後兄は、その毒の塊のような表情を消し、にかつと頬を笑みに歪めた。……しかしその目は欠片も笑っていない。これはまづいなと思ったが弁解する間もなく、兄のことばが続いてしまった。

どうやら私の一言は、兄の導火線に火をつけたらしい。

「クソマネージャーはシフト組み間違えるわ、その癖自分の非認めないでふんぞり返って俺らに尻拭い頼むわ、つかシフトあったところで予定時刻に帰れることなんてクソ稀だわ出社八時で退社深夜とかザラだわそもそも人員不足の癖に売り上げ少ねえとかギイギイ言われるわ上司は人間として終わってるわ三日前に報告入れても当

日「聞いてねえ」ってキレられるわクレーム処理は下っ端に押し付けるわ有給申請なんか以ての外だわ過労で倒れても休み出さねえわちよっと目離せば客は万引きするわの杜蓄という言葉がむしろ美しく見えるようなブラック企業奴隷生活の毎日を送るこの俺に仕事の調子を聞くのかテメエいい度胸だ」

「す、すみませんマジすみません私別に悪くないけどホントすみません」

「ああああああああ畜生あのクソ上司ども腹立つ腹立つ全員死ねッ」

とつぷりと暮れた空に向けて、兄はきィっ、とヒステリーのような声を上げた。

しかし兄の性格と日常の行動指針を見てみると、勤務態度に何らかの問題があつてそのツケがそういつたところで出てきているのではないかなあ、と思つてしまふが口にしない。どこまで本当なのか、店員ではない私にはわからないわけだし、下手なことを言えば兄の逆鱗に触れるだろう。

「お、お兄さん、殺人は犯罪ですよ」

「わかつてるよ。誰も殺したいとは言つてねエだろ」

物言いの物騒さに慌ててたしなめるが、一応その辺りの分別はあるらしく、兄は呆れたようにそう言った。

「ただ、明日にでも予期せぬ事故でうっかり死んで自縛霊になって成仏できずに死後も全力で苦しんで欲しいとは思つてる」

……………。

「まア、あんな会社で働いてるおかげで、ひとつ学んだことはあるけどな」

なんとも言えず、相づちすら打てずに黙り込んでいると、兄は喉を鳴らしてくつくつと笑った。それはなんとも恐ろしい、温かみのない声だった。

腕を組み、小ばかにしたように鼻を鳴らす兄に、私は恐る恐る尋ねた。

「学んだことって、なんですか」

あまり、いいことではなさそうだが。

兄は私を見下ろすと、お前も覚えておけよ、と前置きして。
ひどく冷たい、嫌な笑顔でこう言った。

「幽霊なんざ怖くない。」

本当に怖いのは、――生きてる人間だ」

【「兄の話・転」に続く】

転

調べてみると図書館の閉館時間は午後八時で、急いだ私たちはなんとか閉館時間二十分前に到着することができた。

自動ドアをくぐると心地よい冷風が吹いてくる。兄の速度に合わせてここまでやってきたので、私の体力はもう限界だった。エアコンの冷気を浴びながら肩で息をするが、兄は私をエントランスに置いてさっさとカウンターに歩いていってしまう。本当に、思いやりとかいたわりとかいう言葉を知らない人だ。

兄はカウンターの女性に一言二言ものを言って、新聞らしきものを数部受け取ると、右手奥の本棚に向かって歩いていった。何を調べるつもりなのだろう。

呼吸と鼓動が落ち着いて、さて、と私は図書館の中を見まわした。兄は調べ物に行った。私は――どうしよう。

少し迷った後、兄の行った方向に歩き出した。何をするにしても、兄がどこにいるのか、現在位置を確かめてからでも遅くない。

兄の姿はすぐ見つかった。――というか、女子高生二人が小声で「あの人、超格好いい」などときゃあきゃあ言っているのを盗み聞いてすぐにわかった。性格は最悪ですよ、と心の中で忠告した後そちらへ行くと、予想したとおり、本棚の横に設置された椅子で、何か分厚い本をめくっている。

「お兄さん」

絵になるのが非常に腹立つなあ、などと思いながら目の前に立つと、兄はちらりと視線を上げた。しかしやってきたのが私だということがわかった、興味をなくしたようにまた本に戻る。

いったい何をそうも熱心に読んでいるのか。見てみると、古い新聞を冊子にしたものだった。兄の腰掛けた隣の本棚に同じような冊

子がたくさん置かれているが、そこにはちょうど一冊分の隙間がある。並んだ冊子の名前は『日経新聞 縮尺版』。おそらく兄の手元のものは、その隙間に収まっていたのだろう。

並んだもうひとつの椅子には、新聞が置かれている。おそらく先ほどカウンターで司書から拝借したものだ。日経と読売。日付は――今日からおよそ、二ヶ月前。

「時間、かかりそうですか」

周りに迷惑にならない程度の声量で尋ねると、顔も上げないままで答えた。

「そうでもないと思うけどな。そこらで待ってろ」

そして軽く左手を振る。

揃ってここにいたところで特段得るものはないだろうし、また、楽しくもないだろう。私は了承すると、本棚の間を歩き出した。

陰からこちらを伺っていた女子高生の隣を通り過ぎる。そのとき「妹のほうはそれほどでもない」というかすかな呟きが耳に届いて聞こえてますよ、と言ってやりたい気分になる。まったく、兄と比べないで欲しい。それは私の外見が標準に比べ特段劣っているというわけではなくて、あの兄が格別優秀なだけなのだ。あれが隣にいれば、たいていの人間はかすんで見えるだろう。

第一、私は兄とはヒト科である以上の遺伝子の合致はしていないのだし、似ていないのは当たり前である。長く細く息を吐くことで私は女子高生らの呟きを忘れた。

……さて、何をしよう。

時間も時間だからか、絵本コーナーに、子どもの姿はほとんどなかった。……もしかしたら兄が見たら『いる』のかもしれないけれど、それは生きた子どもではない。

結局、私も私なりに調べてみようという気になった。カウンター司書に言って、二ヶ月前の新聞を数部出してもらう。空いた席をひとつ陣取って、新聞を机の上に広げた。そして、適当に開いた頁の見出しを黙読。アイドルグループリーダー何某、熱愛発覚――何

某社エレベーターに欠陥——廃材でキーホルダー作成——ユキヒヨウの赤ちゃんお披露目——地域で防ぐ児童虐待——官僚汚職事件——働く女性の為の育児サポート——討論会、再度の結束訴え——驚くべき産地偽装の実態——等々。

ユキヒヨウの記事には、写真が載っていた。少々大きめの猫のような動物が二頭写っている。どうやら産まれたユキヒヨウは双子らしい。あらかわいい、このサイズならうちでも飼えるのではなからうかと思ったそのとき、

「痛っ」

頭がかくん、と上がった。

どうやら後ろから髪を引っ張られたらしい。思わず声を上げてしまったが、それでも大声を出すのは避けられた。こんなことをする人は、今現在では心当たりは一人しかいない。そして思ったとおり、天井を移す私の視界に兄の顔が入ってきた。悪がきのような表情で笑っている。

「子どもっぽいいたずらはやめて下さい」

「お前の髪は長いからな、ときどきやってみたくなるんだ。許せ」
そして握っていた私の髪を離した。

自由になった頭を元に戻して、振り返る。見ると兄は、右腕に先ほどの冊子を二部と、新聞を抱えていた。ということとはつまり、開いた左手で私の髪を引いたらしいが、それだけの大荷物でわざわざそんないたずらをしなくても、と思う。兄の価値観とか行動理念はよくわからない。

「お、いいの持ってるじゃねえか。ちよつと貸せよ」

突然目を輝かせた。いったい何のことかと思ったが、兄は私の広げた新聞を興味深そうに見ていた。どうやらその新聞のことを言っているらしい。

やめてよジャイアン、とでも言ったほうがよかっただろうか。私が良いとも悪いとも言ふより早く、それを左手で丸めて持って行ってしまった。座ったまま兄の行動を見ていると、カウンターでまた

何か話している。司書の女性が差し出した一枚の書類に何かを書きつけると、コピー機の元へ行った。どうやら、冊子と新聞のコピーを取るらしい。

頬杖について待っていると、数枚の印刷用紙を片手に戻ってきた。原本は返してきたらしく、もう持っていなかった。

「図書館のコピーってのは本当に面倒だな。許可は要るわ金は取るわ、失敗した分は廃棄が義務の癖に、失敗分のコピー代まで自己負担だわ」

「著作権上の問題なんだろうし、仕方ないですよ」

「どうにも納得いかん」

もちろん抗議をするほどではないようだが、それでも腑に落ちないのだろう、軽く肩を竦めた。

さて、次はどこに行って何をするのだろうか、私は兄の言葉を待った。この兄のことだ、例の幽霊の件の答えが出るまでは、夕食含む他のことには気を向けてくれないだろう。

——そう思っていたから、

「まあいい、さっさと夕飯食いに行くぞ。腹が減った」

次いで言われたその言葉には、心底驚いた。

「え？」

予想外のことに、思わず声を上げてしまう。

ただ私の反応も兄にとっては意外だったらしく、不思議そうに首を傾げた。

「なんだ。腹、減ってないのか」

「いえ、そうじゃなくて」

慌てて否定する。もちろん私だって空腹だ。夕飯は食べたい。幽霊のことなんかよりもそちらのほうが遥かに気になってはいる——が。

兄の気の変わりように驚いていた私は、つい訊いてしまう。

「幽霊のことはもう、いいんですか」

「あ？ ああ」

すると兄は、すっかり忘れていた、とでもいうような反応をした。先ほどもあれだけ入れ込んでいたというのに、いったいどんな心境の変化があったのか。

私が理解できずにいると、兄はやはり、たいしたことではないとばかりに、こう答えた。

「もうわかったから、いい」
それはつまり。

「……えっ」

言葉の意味を理解するまでに、少々の間がかかった。つまるところ兄は、あの少年があの変差点に現れる意味を理解できたというのだろうか――いったい何を、どうやって？

しかし兄は私の心などいざ知らず、淀みない表情で、にっ、と笑った。

「さて、何食いに行くか」

【「兄の話・結（１）」に続く】

結（１）

兄と行く食事の話。

普段誰と行くのか知らないが、また誰に教えてもらうのかも知らないが、兄は小洒落た店をよく知っている。

それらは雰囲気だけではなくて食事も優れており、――別に私を氣遣っているわけではないだろうが――アルコールのあまり好きではない私の口にも良く合う料理ばかりで、だから図書館を出て兄が「行きたい店ができた」と言うから、すわどれほど美味しい夕餉が待っているのだろうと期待していた。

……と、いうのに。

「なんでサイゼなんですかつ」

「安いワインが腹一杯飲みたかったんだ」

向かいの席で、生ハムを咀嚼しながら兄が言う。

兄の案内でたどり着いたのは、全国各所津々浦々、どこにでもあるファミリーストランの喫煙席だった。別にファミレスの食事が嫌で仕方ないとかそういうわけではないが、これだけいろいろな場所に付き合わせておいてたどり着く場所が一般的なファミリーストランというのは、どうにも納得のし難い部分がある。労力との釣り合いというか、そんなものが。

ワイングラスを弄ぶ兄を眺めながら、私はジンジャエールを啜る。「お預け食らった分、高級なお料理食べさせてもらえと思ったのに」

「大衆食堂とミシュラン認定店の違いもわからん貧乏舌が何を言う。元はといえばお前が無駄な噂話なんか俺に言うからこんな時間になったんだろうが」

「私のせいですか。私のせいなんですか」

「お前のせいだ」

と悪びれず答えるから、私が更に言い募ろうとしたそのとき、

「失礼致します」

店員がやってきた。

そして私の目の前に目の前に置かれたものは一枚の皿。白いそれにはティラミスが乗っていた――けれど私はドリンクバー以外、まだ何も頼んでいない。驚いて兄を見ると、兄はにやりと笑った。

「お前ティラミス好きだったろ。好きなだけ食っていいぞ」と言う。

つまりは初っ端に、ワインと一緒に注文していたということだろう。どうやらこれは、兄なりの、私の懐柔策のようだった。目の前に置かれた皿はひんやりとしていて、エスプレッソの染み込んだスポンジと、とろりとした美味しそうなチーズクリームとカスタードソース。振られたココアパウダーの彩りもまた素敵で、

――危なく抱き込まれかけている自分に、はっと気づく。

「そんなんじゃ騙されませんっ」

そっぽを向いて、一秒。

二秒。

三秒。

「いただきます」

「我慢短けエー」

フォークを手にした私に向けて、呆れたように兄は言った。

「犬でも十秒は待てるぞ」

「損得勘定ができるのが人と犬の違いです。待ったところで利益は出ません。ああ美味しい。営業してくれてありがとうサイズ様。一生着いて行きますサイズ様」

「様とまで」

もうこいつとの飯は未来永劫ファミレスでいいんじゃないだろうか、という兄の呟きは聞こえないふりをする。

「ていうかお兄さん、お酒飲みたいなら私じゃなくて別の人が誘ってくださいよ。会社の人とか誘えばよかったじゃないですか」

一口目を咀嚼し、またティラミス突き崩しながら私は言った。

私は酒が飲めない。旨いとも思わない。飲んだことがないとは言わないが、ソフトドリンクの方が安いし旨いし、得である。兄が私に飲酒を強要することはまずないから私としては気安いが、酒を飲む人間にとって相手がそれでは、あまり面白い空間とは言えないのではなからうか。

兄はグラスのワインを飲み干すと、手酌で注ぎながら、

「同期と行くと仕事の愚痴になるから嫌だ」

「そんなもんですか」

「月に五十時間以上サビ残させられてみる……」

酒が入っているからか、珍しく気弱そうなそれである。

兄の仕事の話を聞いたところで社会に出るのがひどく恐ろしくなるだけなので、私は話題を変えることにした。そもそも今の私が聞きたいことは、兄の仕事の愚痴ではない。私が知りたいのは、そう。

「そんなことよりお兄さん、さっきのこと、わかったって」

「それ以上安くできねエって言ってんのに客はわめくし、そもそもうちの会社は労基法上の年休の消化方法が……ん？」

何か専門的なことを言い始めて死んだ魚のようになりかけていた兄の瞳に、私の言葉で焦点が戻る。あれか、と呟いてまた半分くらい一気にワインを飲んだ。「ありゃたいしたことじゃない」

「たいしたことじゃなくても私にはわからないんです。教えてくださいさい」

そう言い募ると、

「考える力は若いうちに使わないと、すぐ駄目になるぞ」喉を鳴らしてまた酒をあおり、「まあ、いい」右手の甲で口を拭うと、息をついた。

「解説してやろう。ただし――」

「ただし？」

復唱する。

兄は右腕を伸ばし、立てかけたメニューを手を取った。
「追加で食い物頼んでからだ」

【「兄の話・結（2）」に続く】

結（1）（後書き）

切りどころがわからず短めになりました。ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199w/>

兄の話

2011年10月10日03時26分発行